

バドミントン男子シングルスにおけるルール改正によるプレーの特徴と比較

Feature and comparison of play by rule revision in badminton men's singles

1K07A029-0 上田 拓馬

指導教員 主査 関 一誠 先生 副査 渡辺 英次 先生

【目的】

バドミントンは、1934年に現在の世界バドミントン連盟 (BADMINTON WORLD FEDERATION・BWF) が誕生してから、さまざまな形でルールが改正されてきた。2006年5月6日、日本の東京で開催された世界国別対抗戦トマス杯ユース杯中に行われた IBF 年次総会において、21点ラリーポイント制の得点システムが加盟各国理事に満場一致で支持され、オリンピックを含む IBF の世界ランキング大会は、この新ルールが適用されることが正式に決定した。それ以前はサービス権あり 15点制 (女子シングルスは 11点) で行われていた。サービス権ありの 15点 3ゲーム制の時には、様々な個性を持った選手が大勢いたように思える。また試合時間も現在のルールに比べて長く、長期戦になることが多かった。21点ラリーポイント制が導入されてから試合時間も短縮され、非常にスピード感あふれる試合展開になってきたように感じられる。そのルール改正により、選手たちにどのような変化があったのか、また両ルールにおいて勝つために必要なことは何なのかを検討したいと考え、この研究を行った。

【方法】

ルール改正後の 21点ラリーポイント制では、2008年に行われた世界一の国を決めるトマス杯を中心とした国際大会から対象となる試合を DVD を使用し分析を行った。またルール改正前の試合は 2004年のアテネオリンピックや、2004年、2005年に行われた国際バドミントン連盟 (IBF) の世界ランキング大会から対象となる試合を選択し、DVD を用いて分析を行った。試合は、ルール改正に伴い変化がより大きくわかるように、ルール改正前と改正後でなるべく同じ選手プレーを比較できるように選択した。

ルール改正前、改正後双方において 5試合ずつ、計 10試合分の総ラリー数、1ラリーの平均回数、ポイントの取得方法、スマッシュ winner について記録した。

【結果】

ゲーム内の総ラリー数と 1ラリーの平均回数を旧ルールと新ルールで比較すると、新ルールには 30-29 (59回) という上限があるため、上限のない旧ルール

の方が総ラリー数は多くなることがわかった。そのため旧ルールの方が試合時間も長いといえる。しかし 1ラリーの平均回数は新ルールの方が多かった。新ルールでは、ミスが必ず相手のポイントにつながってしまうため、1ラリー1ラリー気の抜けない展開が続くようになり、慎重に戦う選手が増えたため、ラリーの質が上がっていた。

ポイントの取得方法に関しては、ルール改正による変化はほとんど見られなかった。両ルールに共通して言えることは、勝つ選手の方がミスが少なく、奪ったポイントの半分以上をスマッシュ winner、ネット winner、その他の方法、つまり自ら奪っているケースが非常に多くみられた。

バドミントンの男子シングルスにおいては、ルールに関係なくスマッシュでより多くのポイントを奪うことのできる選手が勝つ確率が高い。スマッシュ winner は、勝利と密接に関係していた。

【考察】

旧ルール (サービス権あり 15点制から) 新ルール (21点ラリーポイント制) に移行したことによる選手たちのプレースタイルに、大きな変化は見られなかった。変化があったのはプレースタイルではなく、選手の精神的な部分や、試合時間、ラリーの質などに変化があった。ルール改正により試合時間は短縮された。しかし、目まぐるしくポイントが動く新ルール、少しでも気を抜いたら相手に連続してポイントを奪われてしまう。そのため 1ラリー1ラリー気を抜けない展開が続くようになり、選手の精神面にも変化が見られた。また双方のルールにおいて、勝つために共通して言えることがあるとわかった。一つは相手よりもミスをしないうこと。もう一つは自らポイントを奪うことである。ミスが少なくても自らポイントを奪うことができなければ勝つことはできない。逆に自らポイントを奪うことができても、それ以上にミスをしてしまえば勝つことはできない。男子シングルスで勝つためには体力、パワー、スピード、技術、精神力などすべての要素を兼ね備えなければならない。

